

# 第四回地域研究コンソーシアム賞 受賞者発表

地域研究コンソーシアム事務局

地域研究コンソーシアム（J.C.A.S）は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて（一）共同研究の企画・実施・支援、（二）海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、（三）研究成果の国内外への発信・出版、（四）地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあつた研究業績、共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。研究業績を対象とする「研究作品賞」、若手研究者の研究業績を対象とする「登竜賞」、シンポジウムなどの研究企画を対象とする「研究企画賞」、社会連携活動を対象とする「社会連携賞」の四つの部門によって選考を行い、毎年秋に行われている年次集会で受賞者を発表・顕彰しています。

地域研究コンソーシアムの詳細についてはウェブサイト <http://www.jcas.jp/> を、地域研究コンソーシアム賞については <http://www.jcas.jp/about/awards.html> を参照ください。

## 第四回（二〇一四年度） 地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第四回（二〇一四年度）地域研究コンソーシアム賞（JCS賞）の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について同賞審査委員会の審議結果を発表する。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品二件、登竜賞候補作品五件、社会連携賞候補活動一件、研究企画賞候補活動三件の推薦があった。研究作品賞の候補作品については第一次審査によって選抜された作品二件、登竜賞については三件、社会連携賞は一件、研究企画賞については二件の候補作品・活動を、本審査委員会での審査対象とした。これらはすべて第一次審査を経て推薦されたものである。各委員の活発な議論と慎重な審議の結果、それぞれの部門について、以下の作品あるいは活動を授賞対象として選出した。

二〇一四年一月二〇日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会

委員長…西村成雄

委員…長崎暢子、高木正洋、二村久則

### ● 研究作品賞授賞作品

末近浩太著

『イスラーム主義と中東政治——レバノン・ヒズブラーの抵抗と革命』（名古屋大学出版会）

### ● 登竜賞授賞作品

塩谷哲史著

『中央アジア灌漑史序説——ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』（風響社）

高橋美野梨著

『自己決定権をめぐる政治学——デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』（明石書店）

### ● 研究企画賞授賞活動

谷垣真理子（代表）

『国際研究プロジェクト『華南研究の創出』』

（『変容する華南と華人ネットワークの現在』（風響社）

### ● 社会連携賞授賞活動

アジアプレス・インターナショナル

『報道ウェブジャーナル『アジアプレス・ネットワーク』における現代アジア報道』

受賞された五氏には、委員会を代表して心からの祝意をお伝えしたい。以下は、各賞の授賞理由ならびに授賞作品・活動に対する講評である。

## 末近浩太著

『イスラーム主義と中東政治——レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』（名古屋大学出版会）

本書は、著者が「中東政治の結節点」と位置付ける、レバノンのシリア派イスラーム主義組織ヒズブッラー（一般的にはヒズボラと表記されている）の結成から今日に至るまでの動向を、丹念な一次資料の渉獵と文献調査、および現地での聴き取り調査によって跡付けることで、この組織が結節点として関与してきたレバノン政治、中東政治、国際政治の相互連関を重層的に考察した好著である。

本書では、ヒズブッラーを、レバノンという国民国家に誕生した組織でありながら、独自の「外交」を展開しうる自律的かつトランスナショナルな性格を持ち、国民国家を超越しようとするアクターと定義づけたうえで、この組織を中心に据えたときに見えてくる、中東をめぐる国際政治の移り変わりを地域研究の手法で分析している。その際、地域研究に内在する学問領域の横断性を強く意識した方法論が採用されており、イスラーム思想史、国際政治学、比較政治学、人類学の参与観察といった相互に架橋が困難な領域を統合しながら、超国家アクターとしてのヒズブッラーの諸活動を包括的に扱うことで、その議論の射程も国

家・地域を横断した多面的なものとなっている。さらに、本書を評価すべきもう一つの特徴として、従来の中東政治研究では、無数のアクターのひとつとして政治動態論的にしかとらえられてこなかったイスラーム主義組織や運動を、イスラーム思想史を精緻に読み解くことによって、その固有性や内的論理を現代中東政治と有機的に関連付けることに成功している点が挙げられる。これによって、従来はありがなかったイスラーム主義と現代中東政治の研究上の断絶が克服され、この地域の政治と思想を総体として把握することが可能になった。

以上に述べたように、本書は我が国における今日の中東地域研究の一つの到達点を示す著作となっており、今後のレバノン研究、中東政治研究に際しての必読文献となりうる可能性を秘めている。その意味で、地域研究コンソーシアム研究作品賞を授与し、顕彰するにふさわしい作品であると判断される。

## 塩谷哲史著

『中央アジア灌漑史序説——ラウザーン運河とヒ  
ヴァ・ハン国の興亡』(風響社)

## 高橋美野梨著

『自己決定権をめぐる政治学——デンマーク領グ  
リーンランドにおける「対外的自治」』(明石書店)

登竜賞の二作品に関しては、それぞれ荒削りながらも、異なったタイプの地域研究として将来性を高く評価できるとの認識で、審査委員の見解が一致した。選考においては、長い時間を費やして、どちらがより優れているかが議論されたものの、どちらか一方に絞り込むことは、地域研究の多様なあり方を考慮に入れると正しい判断とは言えず、二作品に続く、若手研究者に示すべき研究のあるべき方向性という点からも、審査委員全員の総意として、二作品とも登竜賞に値すると判断した。

塩谷氏の著書は、アラル海南方の、ヒヴァまたはホラズムと呼ばれるオアシス地帯にソ連時代以前に存在したウズベク系王朝ヒヴァ・ハン国の歴史を、灌漑史という切り口から描いた斬新な作品である。先行研究の涉獵と批判的検討を経て、多言語かつ多数の史資料(特にソ連解体以降、利用可能

となった現地資料)を利用して試みられるハン国史再構築の試みは圧巻であり、地域的にも時代的にもこれまでの中央アジア史研究の空白を埋める、優れた実証史学研究である。

基本的には、歴史学・東洋学分野の業績ではあるが、アラル海消滅という現実に直面するなかで、中央アジアにおける水資源問題という今日のかつグローバルな課題を念頭に置きつつ、環境史という文理融合的な研究領域への歴史学からのアプローチをめざしている。そこには、ロシア帝國論の分野での貢献とも相まって、地域研究のあり方に関する筆者独自の立ち位置が示される。この点については、水資源という自然科学の知見をもとりこむべき研究テーマにおいて、実証史学的な視点にやや重きを置きすぎているとの批判も可能であるが、史料に基づく手堅い地域研究という側面から見ても高く評価できる。

高橋氏の著書は、気候変動に伴い地下資源や交通路や防衛拠点の要所として、今日最も「熱い」「国」である極北のグリーンランドの、第二次大戦期から現代までの自治権の拡大をめぐる政治を扱った、世界的にもまれな国際政治学の研究書である。

本書の最大の特徴は、グリーンランドの自治の実態を、「中心—周縁」関係を準拠枠としない、本土社会を介さずに、あるいは本土社会と同等の立場で域外主体との交渉を可能とする「対外的自治」、本土社会に依存することなく自立

的な政治経済社会の構築を志向する「対内的自治」という、二つの概念に区別し、さらにデンマークを「本土デンマーク」と「デンマーク国家」に峻別して読み解き、グリーンランドの自治の「対内的自治」を問わない「対外的自治」という、従来の自治論研究の分析枠組を超越する構図を提示したことである。しかも、グリーンランドの「対外的自治」の志向を、一九七〇年代から今日にいたる歴史的展開の検討により、「対外的自治」の志向が「本土デンマーク」に対峙する形ではなく、E.C.、在グリーンランド米軍基地の問題、北極海域の境界問題など、域外主体・環境主体との国際関係上の諸問題解決のために希求されてきたことを丁寧に読み解いた点は、自治の問題がもはや国内問題としてではなく、国際関係も含めた国際政治問題として論じる必要性を示すものである。この「対外的自治」という準拠枠の企ては、やや構図先行のきらいはあるという意見も出されたが、従来の国民国家の枠組みが対外的にも、対内的にも再考が求められる現代の国際情勢において、グリーンランドないしは北地域研究という点だけでなく、「自治」に関する地域研究の一つのマイルストーンになるものとして、高く評価できる。

以上のように、審査委員会は両著者の将来性を高く評価しつつ、同時に審査の過程において、次のような点が今後深められるべき課題として指摘された。後に続く若手研究者の参考となることを期待したい。

塩谷の作品は、実証史学としての成果をもたらした点は高く評価できるが、中央アジアにおける水資源問題という点からみると、水資源をめぐるマクロな権力関係に焦点が当てられており、対象地域の環境、環境史、水資源を利用せざるをえないミクロレベルの地域住民の生態などへの目配りが十分でなかった点については、むしろ実証史学研究と地域研究のよりいっそうの緊密な結合の可能性に将来性を見いだせると言えよう。今後、水資源問題をより広い視点からとらえながら、さらに展開されることが期待される。

他方、高橋の作品は「中心―周縁」関係を準拠枠とし、自治論の提示をめざしたものと言えるが、グリーンランドがデンマーク政府に多大な経済的援助を受けているという、中心からの「法外な善意」に依存している実態をみる限り、グリーンランドの自治の実態は、「中心―周縁」関係の枠組みから脱却しているというよりは、中心による周縁を包括する新たな政治的柔軟性を示しているとも理解できる。今後さらに理論的検討が必要であるという指摘もなされた。しかし、「法外な善意」が可能となるデンマークの政治的土壌やグリーンランドの地政学的な立地上の特性についての言及もあり、これらの点をさらに深めることをとおして、国家の周縁地域の独立性ではなく、対外的自治の可能性という国際関係のなかでの自治論という一般の問題への展開を期待できる点が指摘された。

谷垣真理子(代表)

「国際研究プロジェクト『華南研究の創出』」  
 (『変容する華南と華人ネットワークの現在』(風響社))

本企画は、「華南」という地域社会の歴史的淵源をふまえ、その華人ネットワーク形成を個人史・家族史の視点から、かつその双方向性機能も含め総合的に分析した国際共同研究である。

まず本企画は、社会学・経済学・人類学・歴史学・移民研究など多様な専門領域からなるグローバルな視野からの華南研究であり、分野横断性のもつ多様性・多層性を具体化した成果と言える。さらに、香港・マカオ・広東・福建・広西・海南などのいわゆる華南地域に限らず、サハラをはじめ、北東アジア・東南アジア・沖縄・欧米を含めた、グローバルに広がる双方向性をもった華人ネットワークの多様性を、国家や地域を超えた地域横断性の視点から多面的に解明した点で、独創性と波及性が高く評価できる。とりわけ、北東アジアを舞台にした華人ネットワークに関する議論では、これまでほとんど知られていなかった事実が明らかにされており、貴重な成果の一つと言える。とともに、現代華南の、とくに香港を含む地域政治社会の構造的変動分析とその研究成果のアクチュアリティに

も注目すべきであろう。

もちろん、個別的内容については、今後さらに分野／地域横断性をめぐる内外の研究者間の相互架橋による、より高次の華南研究の総合化と、多言語による発信が期待される。

こうした総合的かつミクロな事例研究を含む本企画「国際華南研究」は、企画推進過程で具体化した人的ネットワーク(厦門大学・中山大学・香港大学・香港城市大学・マカオ大学など)形成とその蓄積がなければ実現しえなかったと考えられる。その基盤のうえに研究代表者を含む呼びかけで、二〇一一年「日本華南学会」が創設されたことは、華南研究が新たな段階に入ったことを意味することになるだろう。

これらの点に鑑みて、本企画は、地域研究コンソーシアム・研究企画賞に値するものと評価される。

アジアプレス・インターナショナル  
「報道ウェブジャーナル『アジアプレス・ネットワーク』における現代アジア報道」

本活動は、フリーランスのフォト・ジャーナリスト集団である、アジアプレス・インターナショナルがウェブサイトに上で行っている調査報道であり、独自の視点から、現代のアジア諸地域に関する質の高い情報を、ビデオ・ジャーナリズムの手法を駆使しつつ、ウェブサイトの映像を中心とした多様な表現形にて発信し、日本社会に対して問題提起している点はきわめて魅力的であり、かつ意義深い。また、こうした活動は、紛争地も含め研究者が十分に入れない地域や状況にも果敢に向かい報道する結果、メジャーではもたらしえない詳細な情報を地域研究者に提供し、地域研究者による研究成果の公表と相互補完的に、アジア諸地域に対する理解を深め、地域研究の発展に他に類をみない貢献を行っていると言える。

これらの点に鑑みて、同活動は、社会連携賞の授賞対象としてふさわしいものと判断される。

研究作品賞



末近浩太  
(すえちか・こうた)

立命館大学国際関係学部教授。博士（地域研究）。専門は中東地域研究、国際政治学、比較政治学。シリアとレバノンを中心に、イスラーム政治思想・運動の実態解明とその政治的意義・役割についての実証研究に取り組んでいる。英国ダラム大学中東・イスラーム研究センター（CMEIS）修士課程修了、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程修了。著作に、『現代シリアの国家変容とイスラーム』（ナカニシヤ出版、二〇〇五）、『現代シリア・レバノンの政治構造』（岩波書店、二〇〇九年、青山弘之との共著）がある。

登壇賞



塩谷哲史  
(しおや・あきふみ)

筑波大学人文社会科学系助教。博士（文学）。東京大学大学院人文社会科学系研究科アジア文化研究専攻博士課程単位取得退学。ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所留学、日本学術振興会特別研究員（DC2）などを経て、二〇一一年より現職。現地語（テュルク系諸言語）とロシア語の一次史料を用いて、おもに一八世紀以降の中央アジアの灌漑史研究を行っている。とくにアラル海の南方に広がるホラズム地方における人文環境と自然環境とのかわりの変化に注目し、近年では現地でのフィールドワークを進めている。



登竜賞



高橋美野梨

(たかはし・みのり)

日本学術振興会特別研究員P D(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)。博士(国際政治経済学)。専門は国際関係学、北欧地域研究。グリーンランドとデンマークを中心に、北極圏島嶼部の自治構造の解明とその変質過程についての研究に取り組んでいる。デンマーク政府給費奨学生(グリーンランド大学大学院)、日本学術振興会特別研究員D Cなどを経て、筑波大学大学院一貫制博士課程人文社会科学研究科修了。著作に、『デンマークを知るための六八章』(共著、明石書店、二〇〇九年)、『Image of the Region in Eurasian Studies』(共著、KW Publishers Pvt Ltd、二〇一四年)等がある。

研究企画賞



谷垣真理子

(たにがき・まりこ)

東京大学大学院総合文化研究科准教授。博士(学術)。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程単位取得退学。香港大学アジア研究センター留学、東海大学文学部専任講師、同助教、東京大学助教を経て現職。専門は地域文化研究、現代香港論。選挙を軸に香港の政治と社会を分析、二〇〇九年より香港起点の移民について論文を発表。著作に、『原典中国現代史・台湾・香港・華僑華人』(岩波書店、一九九五年)、若林正文・田中恭子との共編、『模索する近代日中関係——対話と競存の時代』(東京大学出版会、二〇〇九年)、貴志俊彦・深町英夫との共編がある。

社会連携賞



石丸次郎

(いしまる・じろう)  
(アジアプレス・  
インターナショナル)

ジャーナリスト/アジアプレス大阪事務所代表。一九六二年大阪出身。朝鮮世界の現場取材がライフワーク。韓国の延世大学に語学留学後、在日韓国・朝鮮人問題などを取材。北朝鮮取材は国内に三回、朝中国境地帯には約九五回。これまで九〇〇超の北朝鮮の人々を取材。二〇〇二年より北朝鮮内部にジャーナリストを育成する活動を開始。北朝鮮内部からの通信「リムジンガン」の編集・発行人。主作品に『北朝鮮難民』(講談社、二〇〇二年)、『北朝鮮に帰ったジュナ』(NHKハイビジョンスペシャル)など。